

おおさか
KEY
わーど
第18回

心ブラ道ブラ平ブラぶらぶら出かけると…

街の空気を求めて



『写真心齋橋』(昭和10年、心齋橋新聞社発行)
に描かれた《心ブラ》地図

に面白い説がある。水府は福助足袋、壽屋(現サントリー)の広告を担当した宣伝マンでもあり、グリコの「一粒300メートル」のコピー、OSK松竹歌劇団のテーマ曲「桜咲く国」の歌詞も作った。田辺聖子さんの名著『道頓堀の雨に別れて以来なり一川柳作家・岸本水府とその時代』に詳しい。

水府は『京阪神盛り場風景』(誠文堂十銭文庫、昭和6年)で、「所謂、道頓堀、千日前、戎橋筋の総称」である“南地”ほど、まとまった盛り場はないとする。銀座には、道頓堀のような「花やかな灯をうつす川」や「芝居」がなく、浅草は「千日前をふくらせただけ」、四条や新京極は「何処かに制限された盛り場」で、「カフェーと色街の灯をうつす道頓堀が、どれだけ若い人たちの心をときめかせてゐるか。それに道頓堀の横っ腹へ渡した四つの橋の味も亦捨てがたい」と絶賛する。

水府に言わせれば、“ブラ”も《銀ブラ》より《道ブラ》が優れている。心齋橋筋を抜けて道頓堀の戎橋までは“一筋道”だが、道頓堀から千日前、南海通、戎橋筋と廻るとコースが四角となって「所謂“ブラ”の生命とする一用事を持たぬただブラつだけの人にとって一番便利な旋曲運動」が可能となるという。《道ブラ》は、「口の字」のように街を四角に散策するだけではなく、横道へ外れたり、最初は「口」でも、「二度三度の旋回には日の字、田の字を書くやうなブラつき方」ができるというのだ。漢字を散歩コースに見たてて面白い。

さらに船場には、モダニズム建築を代表するガスビルの南側を東西に抜ける平野町に《平ブラ》がある。都市計画で通りが拡幅された平野町、毎月の決まった日に夜店が出て、それを冷やかに“ぶらぶら”するのだ。平野町界限には、今もモダン大阪時代を夢見るようなレトロな建築や店舗を見つけることができる。

現代はターミナルに最新の巨大百貨店、ショッピングセンターが開店し、建物のなかで終日ショッピングを愉しむことができるが、街の匂いを求めて繁華街を“ぶらぶら”することこそ、大阪に暮らし、生活するもののお楽しみだろう。ラブラブでぶらぶら、《心ブラ》でウィンドウショッピング、道頓堀は最近、東の方が閑散としてしまったが、水府の句「大阪に住むうれしさの絵看板」には、往年の芝居町を“ブラ”する浪華ッ子のはずんだ気持ちさが表されている。

ここまで書いたら急に街に出たくなくなってうずうずしてきた。で、今回はここで失礼いたします。

華やかな街の空気を味わいに東京の銀座を“ぶらぶら”と散策する、《銀ブラ》という言葉が大正時代に誕生したが、心齋橋筋でも《心ブラ》が流行した。当時のにぎわいは、北尾鎌之助が『近代大阪』(創元社、昭和7年)にまとめた心齋橋筋の“考現学的考察”の章でも分かる、戦後も美空ひばりに「心ブラお嬢さん」という歌もあった。

若い世代には耳慣れないかもしれないが、《心ブラ》はある世代以上の大阪人には懐かしい言葉であり、実は現代も生きている。心齋橋筋1丁目には老舗の呉服店が並ぶ「しんぶら横丁」という路地があるし、近年、商店街が配付している案内地図も、タイトルが『心ぶら日和』(心齋橋筋商店街振興組合発行)だ。今号の表紙は、大阪の街をこよなく愛しておられる新世紀美術協会の三浦敏和画伯が描き溜めた、膨大な平成の《心ブラ》スケッチの一部を拝借した。大阪歴史博物館でも特別展「心齋橋 きもの モダン—煌めきの大大阪時代—」(10月15日～12月4日)が開催され、大阪人の誰もが《心ブラ》を愛していることがわかる。

ご存じだろうか、戦前のお大阪には、他にも“ブラ”があった。ひとつは《道ブラ》。道頓堀界限を“ぶらぶら”することだ。「番傘」を創刊した川柳作家の岸本水府